澪 koh

月刊俳句誌

令和5年2月1日発行
（毎月1回1日発行）
第18巻第2号　通巻200号

2月号

2023

平林禅寺

主宰作品

増成栗人

金鳳山平林禅寺の冬椿

野火止めの寺に紅葉の花筏

雑木林一幹ごとの霜湿り

綿虫の青さよ風の冷たさよ

本尊は釈迦如来像寒波くる

花ひひらぎ峡の日差しの濃く淡く

坂東太郎風花といふ美しきもの

ひとときの雨の来てゐる冬菜畑

一念の色となりたる烏瓜

早咲きの侘助の名は太郎冠者

推敲のひとりの時間しぐれ来る

一つだけの南蛮煙管雨となる

図書館の静寂に冬の日が溜る

作品抄

同人選

白秋忌八重山茶花の白さかな　山岸明子
枯落葉踏んでカオスの中にゐる　相川　健
南瓜に刃入れて一人の夜がくる　坂入喜代枝
ドローンの飛ぶ錦秋の滝の上　井上つぐみ
牡蠣雑炊裏表なく生きて来し　中島　宙
やはらかきマフラー貰ふ誕生日　花本智美
空也忌の海蝕洞の奥の奥　鈴木　崇
返り花赤し輪廻を疑はず　山内宏子
一光の忌なり蝶くる小鳥くる　佐藤あさ子
東京の空の狭さよ銀杏散る　畑田久美子
築山のこんな処に藪柑子　幡　柏

選　増成栗人

会員選

紅葉濃し遊覧船の着く水辺　藤原明美
丹念に栗剥き小林一茶の忌　水谷はや子
新蕎麦とあり一軒の峠茶屋　西條弘子
大空に国境はなし文化の日　ありかわみのる

青空に浮かぶが如く柿たわわ　長沢ひろり
冬うらら草間彌生の水玉も　野村昌代
新米のひと粒づつを噛み締めて　西山二三子
稲光夜の底へと続くやう　佐藤慧美子
母を残し落葉千枚踏みて帰る　菊池ひろ子

選　谷口摩耶

ON THE STREET ―― 平山 雄一

『うまれることば、しぬことば』

酒井順子・著　集英社・刊

197

昨年1月号で『絶滅危惧動作図鑑』（藪本晶子・著）という本を紹介した。時代とともに使う道具や生活様式が変われば、絶滅する動作がある。たとえば電話をかけるときに「ダイヤルを回す」動作は、ほぼ絶滅してしまった。俳句では「牛蒡引く」など生活の動作を描くことが多いから、動作絶滅の影響は大だ。今回、紹介する『うまれることば、しぬことば』では、文字通り「言葉」の生き死にについてエッセイの名手・酒井順子が論じる。その観察眼は鋭利多角で、多くの発見が提示される。「言葉」は「動作」よりも速いスピードで盛衰を繰り返している点に注目して読んだ。

冒頭のテーマは「Jの盛衰」。東京のFM局「J・WAVE」は1988年にスタートした。当時の選曲は洋楽中心で、わずかにかかる日本のポップスが後に「J・POP」と呼ばれるようになる。産業界では日本専売公社が85年にJTを名乗り、87年に日本国有鉄道がJRとなる。スポーツ界では93年、「Jリーグ」が発足。子供たちに「将来の夢は？」と聞くと「Jリーガー」と答えるケースが普通になった。

これらの変化は昭和末期から平成にかけて起こった。酒井は昭和の日本のバイタリティが重く感じられ、軽くてオシャレな国でありたいというムードが「J」に現れたのではないかと推論する。その後、平成末期になると再び「日本」への回帰が起こったとも指摘。昭和から平成をはさんだ令和において「J」はその役割を終え、世界の自国第一主義を反映してか「日本」の良さをアピールする動きが顕著になった。一つの文字や言葉が時代の空気を変える力を持ち、一方で寿命のあることを酒井は読み取るのだった。

「サルビアや砂にしたたる午後の影　津川絵理子」

「イエスゐるやうにラグビーボール置く　齋藤朝比古」

「ポロシャツの鰐をめがけて水鉄砲　太田うさぎ」

これらの句は平成に詠まれた。「軽やかさ」を求めた時代の空気をよく反映している。「イエスゐる」や「ポロシャツの鰐」などの表現がポップな輝きを放つ。これらを「J俳句」と呼んでみたくなった。

〈コロナとの「戦い」〉という章で、酒井は各国首脳がコロナ禍を「戦争」と呼んだことについて書いている。2020年3月、故・安倍首相（当時）「人類が新型コロナウイルスに打ち勝つ証として、東京オリンピック・パラリンピッグを完全な形で実現する」と語った。トランプ大統領（当時）も「これは戦争だ！」と叫び、「戦時下の大統領」を自称。故・エリザベス女王も「私達はウイルスとの戦いに勝つ」と言っていた。しかしこれらの発言は、ウイルスの感染力や毒性の強弱が分かってくるにつれて「ウィズコロナ」という言葉が流通し始めると、いきなり古めかしく感じられていった。

酒井はここでも鋭い観察を行なう。首相に「不屈の覚悟で戦い抜こう」と呼びかけられても、日本国民はいまいちピンと来なかったが、志村けんさんが罹患死すると、弔い合戦的感覚で「気を引き締めなくては」と人々が思ったと述べる。およそ「戦い」という言葉が似合わない首相のヒロイックな言動に、「コロナ戦争」があっさり風化していった遠因があるのかもしれない。

「ウイルスも上司の指示も変異する　K・U」

「8時だよ!!昔は集合今閉店　山のパン屋」

これらは昨年の「第一生命サラリーマン川柳コンクール」の入選句。「変異株」や「時短要請」などの時事的な事象には、俳句よりも川柳が有効な表現手段であるようだ。

〈「だよ」、「のよ」、「です」〉の章では、日本語の口語の語尾の男女差についてがテーマとなる。以前は女性が「だよ」を遣うことは滅多になかったが、若い世代では一般的になっている。「のよ」や「わ」などの女言葉はある程度、年配の女性が遣うことが多い。あるいはマツコ・デラックスのようなゲイの人がよく遣うのだという。また尾木ママのように「言葉の女装」をする男性もいたりする。いずれにしても日本語の男女差は、近い将来に極めて小さくなりそうだと予測。

丁寧語の「です」に関しては依然として公の場で遣われていて、ちょっと不良っぽい矢沢永吉でもファンに向かって「ヤザワだよ」とは言わず、「ヤザワです」となる。「だよ」はプロレスラーや若い俳優などが自分の破天荒さをアピールするときに遣われている。ただし当の酒井は敬語文化で育ったので、どうしても「酒井だよ」と自己紹介することができないと悩む。この真っ当な当事者意識が、本書の論拠となっている。

「こんにちはスケベな花咲爺だよ　北大路翼」

作者の翼は間違いなく「だよ」が似合う俳人だ。

最後に酒井はこうまとめる。「今、我々が使用しているのは、生死を繰り返す言葉の残骸が堆積してできた分厚い層の、ほんの表面部分でしかありません。（中略）そんな今だからこそ、ある言葉がどのように生まれ、ある言葉がどのように死んでいったかを考えることは、他者を理解することに繋がる気がしてなりません」。

今、自分たちはどんな言葉の層に生きているのかを問うのは、俳句を作る上で大切なことだ。次の句は紛れもなく令和の句であると思う。

「吹き抜けや四月がピザのやうに来る　西生ゆかり」

吟行メモリー

亀戸界隈

祐森司

十一月二日、それは素晴らしいお天気に恵まれ、亀戸天神～普門院（伊藤左千夫の墓）、時間があれば、亀戸水神宮、亀戸五番街商店街を回る予定であった。

亀戸という名は大変に不思議で、何故カメイドと読むのかは諸説がある。が、亀戸天神には正真正銘の「亀井戸」の井戸跡があるというので、大いに期待したいところである。

今回の参加者は、主宰を含めて七名、桂子、つぐみ、明子、利宏、枝里、森司。

我々は、十一月の明るすぎる空の下、亀戸駅を貫く明治通りをゆるやかに遡上した。この明治通りは蔵前通りと交差する。そこを左折するが、その角一等地に見るからに老固とした炒豆屋がある。だが、時間が早くまだ開いていない。帰りに寄ることとする。

亀戸天神は亀戸駅から徒歩十五分ほど。現代的な街並みの中に、どことなく門前町らしい風情の商店や飲食店もあり、往時の面影が見えるようである。

1 亀戸天神の参道と鳥居

天神様の参道は、意外とシンプルで少し拍子抜けするぐらいの簡素さだった。（写真1）亀戸天神の参道は、かつてはもっと南の少なくとも旧千葉街道まで伸びていたはずだが、戦後の都市計画で現在のように区画されたと思われる。

今は五十メートルばかりの参道の先に、天神様の赤い鳥居が青空に映えていた。我々はその鳥居にしばらく佇み、やおら境内へ足を踏み入れた。

鳥居をくぐると境内の半分を占めるだろう池がある、その池に太鼓橋が二連に架かっていた。これは真に珍しい。（写真2）

これを越えるといきなりの本宮になる。

太鼓橋二つ渡れば冬がくる　栗人

池のぐるりが有名な藤棚で、その他、やはり梅の木が種類を分けて多く植えられ、白い山茶花の垣根に風情があった。

白秋忌八重山茶花の白さかな　明子

2 太鼓橋

神社はこじんまりとした佇まいで、それでいてどことなくゴージャス、これが江戸の粋というやつだろう。

そして、折からの菊祭りが、その右手に開かれていたのだが、今年は開花が遅れていて、二分三分の段階。

一同やや残念な思いであったが、

日陰にて声の大きな菊師かな　枝里

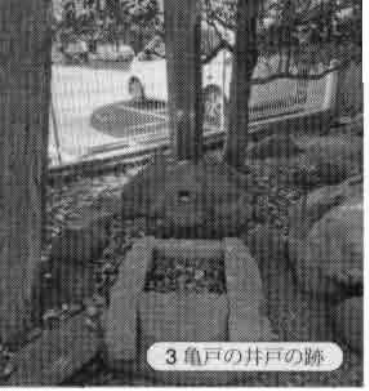
神域横手、見事な銀杏黄葉の下に「亀井戸の跡」はあった。あったが、なんとなく眉唾の感が強い。亀形の石の上に「亀井戸の跡」と彫られた石碑が新しく、井戸の痕跡が貧弱なのである。どうもこれはハッタリではないだろうか？（写真3）

いてふ黄葉日向大きく動きけり　森司

我々はしばらく散策、ひたすら俳句の種を物色し、池の鯉や亀にも注目が集まった。

石の上の動かざる亀天高し　つぐみ

亀戸天神菊の下葉に雨の粒　栗人


3 亀戸の井戸の跡

4 伊藤左千夫の墓

思わず時間を過ごした我々は、「伊藤左千夫の墓所」へと急いだ。左千夫の墓は、亀戸天神の東、通りを二つ越えた先の「普門院」（福聚山善應寺）という真言宗の古刹にある。ただ寺はご多分に洩れず、荒廃が激しい。主宰の記憶では（左千夫の墓は寺の左の墓域にあったはずだ）というので、うろうろと探して、やっと訪ねあてた。（写真4）

墓石は、少し傷みを見せていたが、立派なもので、赤く熟れた令法（りょうぶ）の木の下に置かれていた。

木の実落つ音か左千夫の墓ほとり　利宏

と気が付けば、お昼に近い時分である。

早々に切り上げ、昼食を取り、句会場へ向かわねばならない。炒豆屋も見ねばならない。その炒豆屋なのだが、昔はさぞやと思わせる道具立てではあったが、年代物の十二、三ほどの木製のケースには申し訳程度の豆が置かれ、さらに店番の老女が、怖い目つきで辺りを睥睨している不思議さ。どうやら商いをする気ではないような。下手に写真など撮ろうものなら噛みつかれかねない。危うきに近寄るなかれである。

しかし、しっかり詠んで

炒豆屋に昭和の匂ひ冬隣　桂子

やはり、吟行は楽しい。いつもそう思う。

次回、平林寺での紅葉狩りである。

ちょっとそこまで 第45回

「猿島・砲座の並ぶ丘の上」

鈴木　崇

横須賀・三笠公園から船に乗って十分で行ける無人島がある。東京湾最大の自然島・猿島。残念ながらサルは住んでいない。

明治十四（1881）年から明治十八年にかけてこの島に東京湾防衛のためレンガの要塞が建設された。日本では珍しいフランス積みの要塞跡は、現在でも良好な状態で残り、見学ルートが整備されている。砲台や弾薬庫、兵舎などが迷路のようにつながり、まるで「ラピュタの城」に迷い込んだような気分になる。

海水浴場の砂浜から対岸を一望すると、普段暮らす町を俯瞰でとらえることができ、新鮮だ。

横須賀には猿島のほかにも、海が見渡せる丘に東京湾要塞跡が数多く残る。

観音崎公園は、東京湾への入り口を守る要衝として明治に入って砲台が設置され、猿島同様、終戦まで一般人の立ち入りは禁止されていた。明治十七年に竣工した北門第一砲台、三軒家砲台などが、原形に近いまま残っている。

また、観音埼灯台はフランス人技師ヴェルニーの設計による日本最初の洋式灯台。明治元年に起工し、翌年点灯した。現在は三代目の灯台が建つ。灯台に上がって見学することもできる。

構内左手に句碑が並んでいる。その一つは高浜虚子のものだ。

霧いかに深くとも嵐強くとも
高浜虚子

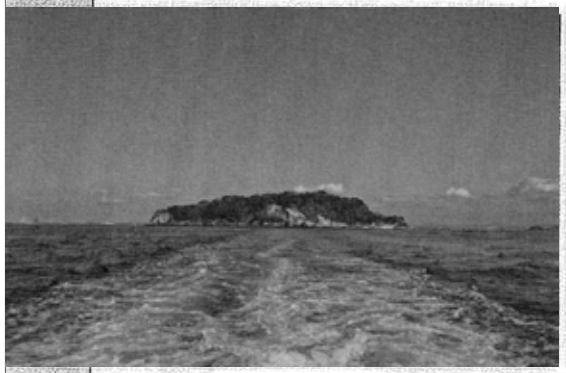
昭和二十三年秋、虚子は観音崎を訪れ、岬に立つ灯台の雄姿と、ここに勤める職員の姿を句に詠んだ。この年は、海上保安庁が創設され、灯台80周年記念式典が行われた年でもあった。海から吹く風を受けながら、句碑の前で味わいたい句である。

東京湾の水深は浅い。もとは陸地であったため、海底には大きく蛇行した溝がある。かつて陸地であったころ流れていた「古東京川」の名残だ。この海溝を利用して浦賀水道航路はとられている。東京湾の川跡に沿って船が通っていると思うと、ロマンを感じる。

今回、いくつもの要塞跡を取材したが、海が臨める見晴らしの良い場所にはたいていい砲台が設置されていることが分かる。東京湾に入る航路を守るため絶好の立地条件というわけなのだが、現在は公園となっている場所で、かつての軍事利用の歴史を考えさせられる。

取材時、にわか雨に降られて要塞跡の弾薬庫で雨宿りをすることになってしまった。葉を打つ雨音を聞きながら、弾薬庫の暗闇に目が慣れていくのを待つのはなかなか得難い時間だった。

「古東京川」を行き交う商船を眺めつつ、平和の意味を噛みしめたい。



横須賀・猿島

羽音集

谷口摩耶　選

青空に浮かぶが如く柿たわわ　流山　長沢ひろり

薬師寺への道の秋草雨となる

長谷寺の本堂越しの薄紅葉

鳥獣戯画訪ね冷え冷え寺の床

路地裏の子らのかけつこ小鳥来る　習志野　野村昌代

山盛りの栗のワイン煮ほつぽぽぽ

文化の日裁縫箱の針の山

北極を開く地図帳小六月

算額の問題を解く枇杷の花

冬うらら草間彌生の水玉も　豊橋　西山二三子

暖炉燃ゆ梨北の里のしづけさよ

珈琲はいつもブラック秋深し

どんぐりを並べてをりぬ二歳の手

電飾のごとたわわなる柿の山

新米のひと粒づつを噛み締めて

里芋の皮剥きは夫日の暮るる　さいたま　佐藤慧美子

稲光夜の底へと続くやう

肉まんをひとつ注文冬ざるる

山茶花の三輪咲くや露天風呂

草野球の応援席に赤とんぼ

俳誌のサロン

http://www.haisi.com/koh/index.htm